

# 嘘を吐く時に何が心をよぎるのか

## What We Think about When We Tell a Lie

石川 悟

Satoru Ishikawa

北星学園大学

Hokusei Gakuen University

ishi\_s@hokusei.ac.jp

### Abstract

In this study, participants were requested to refuse an invitation from his friend by telling a lie, and to evaluate considerations while thinking the lie subjectively. Participants were categorized three groups with these evaluated values, especially depending on the degree of avoidance of responsibility. This tendency to avoid responsiveness was also observed in the contents of lies told by subjects.

**Keywords** — Telling a Lie, Avoidance of Responsibility

### 1. はじめに

人が嘘を吐く時、あるいは他者を騙そうとする時、他者を自身の意図通りに誘導させるのであれば、多くの事柄を考慮する必要がある。これまでの研究では嘘を吐く相手となる他者のどのような内的過程を推定しているか[1][2], あるいは嘘を吐く時に他者の内的過程をどれだけ推定しようとしているのか[3], 検討を進めてきた。

実際に嘘を吐く時には、このような内的過程の推定をおこないつつ、嘘を吐くことによって自身が受ける利益や嘘が露見した時に被る被害、あるいは嘘を吐いた相手に対して与えるであろう影響や嘘を吐くことによって相手が被る被害等、様々なことを考慮して、「どのような嘘」を吐くべきか決定していると考えられる。さらにこれらの事項の内、どの事項をどれだけ考慮するのかによって、嘘を吐く行動は影響を受け、実際に吐かれる嘘の内容も異なってくると考えられる。本研究では、被験者に嘘を吐かせた後に主観的に評価させた「嘘を吐く時に自身が考慮した」と「吐かれた嘘」との間に、どのような関連性が見られるのか探索的な検討をおこなった。

### 2. 方法

「嘘を吐く時に自身が考慮した」と「吐かれた嘘」との関連性を検討する嘘吐き場面は、質問紙として用意した。被験者には、文章で提示された「ある場面」の「あなた」になったつもりで2回嘘を吐かせ、続く回答項目に回答させた。

**被験者** 大学生 150名(女性 75名, 男性 75名)が実験に参加した。

**質問紙** 被験者は、提示された「ある場面」を想像しながら文章を読み進め、その後に設けた質問に回答した。「ある場面」には、被験者である「あなた」と、「友人A」、「友人B」を登場させた。「友人A」との関係は、『最近知り合った「あなた」と同性の友人』であり、『「友人A」は「あなた」を慕っているが、「あなた」は「友人A」が苦手』、とした。一方「友人B」との関係は、『昔からの付き合いのある「あなた」と同性の友人』であり、『お互いに慕い合う関係』とした。

被験者に読ませた「ある場面」は次のようなものだった。被験者である「あなた」が「友人A」から遊びの誘いを受け、乗り気ではなかったが遊ぶ誘いを承諾した。翌日、「あなた」は「友人A」と約束していた日時と同じ日時に「友人B」から遊びに誘われ、「友人B」の誘いを受けることを決め、「友人A」からの誘いを断る嘘の口実を、「友人A」に嘘について誘いを断ることにしました。このとき「あなた」ならどのような嘘をつきますか?と教示し回答させた(1回目の嘘)。この時「友人B」は「あなた」が「友人A」の誘いを断って自分の誘いを受けたということは知らないことにした。

続いて、「友人B」と約束をした日に「あなた」が「友人B」と軽い食事をしていると偶然「友人A」が現れ「あなた」に声をかけてきた場面を読ませ、その状況で「友人A」に返す言葉を、「あなた」はAさんに何か言い訳をしますとします。「あなた」ならどのような言い訳をしますか?と教示し、回答させた(2回目の嘘)。

2回の嘘を回答させた後で、「1回目の嘘」の回答時と「2回目の嘘」の回答時に被験者「嘘を吐く時に自身が考慮した」ことが何か以下の様に回答させた。

まず「1回目の嘘」の回答時に、「嘘が友人Aにばれないようにすること」、「友人Aがどのような気持ちになるのか」、「自分が友人Aに責められるのではない

か」の3項目、「あなた」自身の状態に関する5項目（「怒られること」、「嘘がばれること」、「どうしたら嘘を隠せるのか」、「嘘を隠すことができるのかどうか」、「嘘をつくときの表情を含む振る舞いについて」）、および「友人A」に関する5項目（「嘘をついてしまうということ」、「傷つけてしまうこと」、「怒らせてしまうこと」、「悲しませてしまうこと」、「失望させてしまうこと」）のそれぞれをどの程度考えていたか、1（全く考えなかった）～5（とてもよく考えた）の5件法で回答させた。

次いで、「2回目の嘘」の回答時に「自身が考慮したこととして」、「1回目の嘘のこと」、「友人Aに関すること」、「友人Bに関すること」、「あなたに関すること」の4項目、および「あなた」自身の状態に関する5項目（「怒られること」、「責められること」、「どうしたらうまく切り抜けられるのか」、「その発言が適切かどうか」、「表情を含む振る舞いについて」）、友人Aに関する5項目（「嘘をついてしまうということ」、「傷つけてしまうこと」、「怒らせてしまうこと」、「悲しませてしまうこと」、「失望させてしまうこと」）、さらに「友人B」に関する4項目（「傷つけてしまうこと」、「怒らせてしまうこと」、「悲しませてしまうこと」、「失望させてしまうこと」）のそれぞれをどの程度考えていたか、1（全く考えなかった）～5（とてもよく考えた）の5件法で回答させた。

### 3. 結果

「1回目の嘘」を吐いた時に考えていた程度（「嘘が友人Aにばれないようにすること」、「友人Aがどのような気持ちになるのか」、「自分が友人Aに責められるのではないかと」、「2回目の嘘」を吐いた時に考えていた程度（「1回目の嘘のこと」、「友人Aに関すること」、「友人Bに関すること」、「あなたに関すること」）に対する回答結果にしたがってクラスター分析をおこなった結果、3群（A群(91名)、B群(41名)、C群(16名)）に分けられた。

クラスター分析に用いたそれぞれの回答項目への回答結果を従属変数とし、クラスター分析に依り分けられた群を要因（3水準）とする分散分析の結果、どの質問項目においても群要因の主効果が見られ、「1回目の嘘」についての3項目、および2回目の嘘の時の「1回目の嘘のこと」と「友人Aに関すること」では、A群、B群がC群よりも高い値を示した。一方、「2回目の嘘」を吐いた時の「友人Bに関すること」と「あ

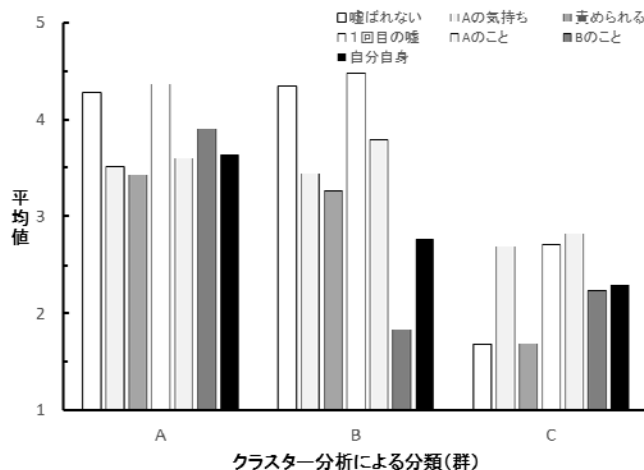


図1. 群別の各評価項目の平均値

なたに関すること」についてはA群の値がB群、C群よりも高くなった（図1参照）。

すなわち、A群の被験者は、「1回目の嘘」の時は「友人A」に嘘がばれないことを考慮し、「2回目の嘘」の時は「嘘のこと」に加え友人のことや自分のことについても考慮する傾向がみられた。B群の被験者は、「1回目の嘘」の時にはA群同様「友人A」に嘘がばれないことを第一に考えるが、「2回目の嘘」の時は嘘のことと「友人A」に関することを考慮する一方で、「友人B」のことや自分に関することは考慮しない傾向が見られた。C群の被験者はA・B群とは大きく異なり、「1回目の嘘」と「2回目の嘘」のどちらの嘘を吐く時に、いずれの質問項目に対しても十分に考慮する傾向は見られなかった。

このような傾向が実際に被験者が吐いた嘘とどのように関連しているのか明らかにするため、まず被験者が「1回目の嘘」として回答した結果を、その内容にしたがって以下のように7つに分類した（表1）。

表1. 被験者が吐いた嘘の分類(1回目の嘘)

	内容
タイプA	約束の日時にバイトが入った
タイプB	約束の日時に家族／親族に関わる用事が入った
タイプC	約束の日時に自身に関わる用件ができた
タイプD	約束の日時に急用ができた(用件を示さない)
タイプE	約束の日時に先約があったことを忘れていた
タイプF	約束の日時に先約があった
タイプG	「Bさんとの約束」と特定した

次にクラスター分析により分類された各群の被験者が「1回目の嘘」としてどのような嘘をどれだけ吐いたのか調べたところ表2のようになり、群ごとに吐く嘘の傾向が異なった ( $\chi^2[12] = 28.7, p < .01$ )。

表2. 各群の被験者が吐いた嘘のタイプわけ(1回目の嘘)

	A群	B群	C群
タイプA	25	8	1
タイプB	17	11	2
タイプC	16	3	1
タイプD	17	3	4
タイプE	6	7	1
タイプF	7	9	7
タイプG	3	0	0

同様に被験者が「2回目の嘘」として回答した結果を、その内容にしたがって5つに分類した(表3)。

表3. 被験者が吐いた嘘の分類(2回目の嘘)

	内容
タイプあ	用件が早く終わった/無くなった
タイプい	用件が終わり/無くなり、偶然Bさんに会った
タイプう	用件が終わった/無くなったのでBさんと会うことにした
タイプえ	用件が無くなった後Bさんから誘われた
タイプお	急な用件がBさんと会うことだった

その上で各群の被験者がどのような嘘をどれだけ吐いたのか調べたところ表4のようになり、群ごとに吐く嘘の傾向が異なった( $\chi^2[8] = 19.9, p < .05$ )。

表4. 各群の被験者が吐いた嘘のタイプわけ(1回目の嘘)

	A群	B群	C群
タイプあ	44	22	1
タイプい	11	1	2
タイプう	4	0	0
タイプえ	4	1	0
タイプお	26	17	11

#### 4. 考察

「嘘をつく時に自身が考慮した」ものが何か、そしてその程度がどのくらいか探索的に検討を行った結果、被験者を3群に分けることができた。また、2種類の「場面」で吐かせた嘘は、その内容にしたがい分類することができた。その中には、「嘘を吐くように」と教示したのにもかかわらず、「嘘」ではなく「真実の吐露」となったケースもあった。

A群の被験者は「如何に上手く嘘を吐くか」、そして自分自身が関わる事柄に焦点を当てて考慮していたと自己評価した。A群の被験者が吐いた「1回目の嘘」の8割近くが「自身の都合ではなく外的な要因により都合が悪くなった」という嘘であり、「嘘がばれないこと」を重視しつつ「自身が責められる」ことから避けたい傾向が明確に現れた。「2回目の嘘」においても「自身の都合ではなく用件が早く終わった」、あるいは「Bさんにたまたま会った」と外的な原因によって「嘘を吐く事態」が生じたとする嘘が多く、自責から逃れようとする傾向が見られた。同様の傾向は「先約があった」「Bさんと会うことだった」という自責的な「真

実を吐露」する被験者が少ない点にも認められた。

一方B群の被験者は、「嘘を吐く時」の自己評価において大まかにはA群の被験者と同様の傾向を示したが、「2回目の嘘」において「Bさんへの考慮」や「自身への考慮」を示す傾向は見られなかった。1回目の嘘を吐く時には「自身が責められる」ことを考慮する程度はA群と差異が見られなかったが、A群の被験者より自責的な傾向は、実際に「吐いた嘘のタイプ」に現れた。B群の被験者は「先約があったことを忘れていた」という嘘を吐く者が多いのに対し、「具体的な用件を示さない」嘘を吐く者は少なかった。同様に「2回目の嘘」においても「Bさんとたまたま会った」という回答は見られず、自身で「用件がBさんと会うことだった」と「真実を吐露」する割合が高くなった。

少数(全体の1割)現れたC群の被験者は特殊な傾向を示した。自己評価はどの項目においても低く、特に「1回目の嘘を吐く時」に「嘘がばれないこと」や「自分自身が責められること」についての評価が低かった。このことはC群の被験者が実際に示した嘘においても明確に現れ、「嘘を吐く」というよりも「真実を吐露」するケースが半数近くにのぼった。「2回目の嘘」においても「用件がBと会うことだった」と「真実を吐露」するケースが8割近くになった。このことは、C群の被験者は、「嘘を吐いてごまかす」のではなく「真実を吐露」ことにより重き置く判断基準を用いていた、と考えられる。しかし、観察された事例数が少なく、一般化可能であるかさらなる検討が必要である。

今後、このような嘘を吐く時に見られた「考慮すべき事柄」の違いやその程度の違いがどのような社会的事柄の認識と関連するのか、そして実際の「嘘を吐く」という行為にどのように影響するのか、さらなる検討が必要である。

#### 参考文献

- [1] 石川 悟・長田悠吾・大森隆司, (2009) “他者の意図を誘導する自己の行動調節 ～販売場面における予備検討～”, 日本認知科学会第26回大会発表論文集, pp. 164-165.
- [2] 石川 悟, (2011) “自身の意図の隠蔽と他者の意図の誘導”, 日本認知科学会第28回大会発表論文集, pp. 399-401.
- [3] 石川 悟, (2015) “自身の「嘘」に対する確信の生まれ方 ～他者視点取得と懸念的被透視感から～”, 日本認知科学会第32回大会発表論文集, pp.494-497.